

樺太からの引き揚げ体験談

小山 敏栄

私が生まれたのは、樺太の^{しりとり}知取という土地です。中心地である^{とよはら}豊原から 250km 離れた場所にあり、知取の中でも郊外に住んでいました。

当時の樺太には製紙工場と炭鉱が7つほどあり、周りは日本人ばかりで、40万人が住んでいました。父は北海道池田町の富士製紙工場に勤めていましたが、紹介で知取の製紙工場へ転勤しました。父は出兵せず工場勤務で、兄二人が国内の戦地へ向かいました。

樺太での生活の思い出は、フレップという赤い実(コケモモ)をシロップにして食べたり、線路にこぼれた石炭を拾ったりしていたことです。街の神社のお祭りでは、日本から来るサーカスを見た記憶もあります。

引き揚げは二度経験しています。

一度目の引き揚げは昭和20年で、当時5歳でした。樺太からの引き揚げ船3隻が旧ソ連の潜水艦の攻撃を受け、^{おおどまり}大泊で中止となって引き返しました。(1,700人が亡くなった事件で、犠牲者の多くは優先的に乗せられた女性と子どもたちでした。)引き揚げが中止となり、豊原の女学校の体育館で10日間ほど雑魚寝をする生活を送っていました。800人ほどいたと思います。

豊原に滞在中、空襲を経験しました。旧ソ連軍の3機が豊原駅を狙い、焼夷弾を投下していました。女学校は無事でしたが危険なため、汽車で知取へ戻りました。そのころ日本では8月15日に終戦しましたが、旧ソ連には関係がないようでした。

二度目の引き揚げは昭和22年で、当時7歳でした。財産はすべて置き、持ち物は着替えだけ。家族全員で乗船し、^{まおか}真岡から函館に到着することができました。樺太から全員が引き揚げるまで、第5次にわたり昭和25年ごろまでかかっていたため、待ちきれ

ずに密航する人もいました。引き揚げ船の名前は「雲仙丸」です。

7歳ということもあり、怖いという感情はありませんでした。何のことかわからず、両親に従っていたのだと思います。乗船前には全員シャワーを浴び、疫病予防の消毒を受けました。函館港に到着した後も、すぐには下船の許可が下りず、5月16日から5月20日までの4日間、待機していました。

函館に上陸後、母の実家がウトロ(知床)にあるため、仕事を探しに製紙工場のある釧路市へ行きました。兄弟はみな工場に勤めたので収入が安定し、生活に困ることはありませんでした。

母からは当時の様子をよく聞きましたが、出兵した兄とは戦争の話をしませんでした。